

## 自分の考えをもたせる

### 「読み」のために

新しい指導を考える会

#### 1 板書を写す生徒たち

授業後、指導アシスタントの先生（指導の補助員）から「Aさんは初めはまったく教科書を開かず、ノートを一生懸命に写していました」と聞かされ、愕然とした。教室の一番後ろの席で、控えめな生徒ではあるが、「教科書を開かず」とは気づかなかった。その先生がAさんに気づいて、「教科書を開こうね。」とアドバイスしてくださったそうである。

気づかなければ、Aさんは恐らく板書を丁寧に写して、仲間の意見をそのまま視写して終わっただろう。自分がそんな生徒の姿を作っていたことを恥じずにはいられないが……。しかし、教科書を開いていても挙手をするということもなく、考えを述べることもなく、ただ板書を写して授業を終える生徒はいる。黙っていても仲間の意見を聞いて考えていると思いたいが、本当に考えているだろうかと思わずにいられない。生徒が必ず考えている授業にしなければならない。

第一時間目で全文通読した後、疑問や感想をもち、二時間目でそれらを出し合った。そこでは前記のような疑問が出たので、これらを各時間の学習課題とした。盗みの場面が生徒には印象深く、「盗みより、ちょうをつぶした方が『僕』の心を苦しめる」がわからないから考えたい、などの意見が多く出された。生徒の疑問に向かい合うことによって、言葉に立ち止まり、人物の行動や心情と自分自身の心情を重ね合わせて読み、さらに仲間の考えと比べることで言葉の奥深さに感動し、的確に読む力をつけることができると考えた。

#### (2) 文章中の言葉を大切にしたい一斉指導

第四時『僕』のちょうへの思いを読み取る」の話し合いでは、次のような展開となった。（Tは教師、A～Eは生徒）

T 「僕」は嘆賞しているが、憎んでもいる。エミールになぜコムラサキを見せたのだろうね。そして結局こっぴどく批評されるのだけど、同じ趣味をもち、家も隣なのに仲良くできないのかな。二人の何が違うのだろう。

A それは自分のちょうを自慢したいからだと思います。何でもできるエミールも、コムラサキだけはもっていない。模範少年をねたんでいたのだから、「僕」だってすごいんだぞということを見せつけたかったと思う。

T Aさんの考えに賛成という人は？（一人ほど）

A えっ！ 違うの？

B わたしはAさんと同じ意見なんですけど、エミールは「非の打ちどころがない」という悪徳をもつ」と書いてあるし、それは「気味悪い」と良くは思っていないから、珍しいコムラサキを見せれば勝てる気がして見せた。すごいだろうという気持ち。

#### 2 話し合い活動を取り入れた授業

特別な準備をして何時間もかけて行う研究授業などではなく、日々の一時間の授業の流れとして、次のような展開を多く用いる。

音読→一人読み→小集団の話し合い→一斉指導→まとめ

話し合いを取り入れて一人一人が発言する機会を作るとするのがこの展開の良さであるが、さらに次のような工夫で、より生徒が考えをもてるようになると考えられる。

- (1) 生徒の疑問を課題に使う指導計画
- (2) 文章中の言葉を大切にしたい一斉指導
- (3) 生徒が理解できるわかりやすい評価規準

(1) 生徒の疑問を課題に使う指導計画  
ここでは、『少年の日の思い出』（二年）を指導した例を紹介する。

① 指導目標 表現に即して的確に読む力を身につける。

② 学習計画

- 第一・二時 全文を通読し場面分けをしながら疑問を分類する
- 第三時 現在の部分なぜあるのだろう
- 第四時 「僕」のちょうへの思いを読み取る
- 第五時 なぜ「僕」はクジャクヤママユを盗んだのか
- 第六時 なぜ「僕」はちょうを指で粉々につぶしたのか
- 第七時 なぜ現在の場面に戻らないのか・主題は何か



【仲間と意見を交換する】

T 「ああ、すごいなあ」のはずが、そうでなかった。本当はなんて言うはずだったんだろうね。

A 「すごいなあ、僕もほしいなあ」と言わせたかった。

T なるほどねえ。でも違ったね。なぜかな。

C わたしはAさんたちの考えとは違うのだけど、エミールは意地悪で批評したのではない気がする。

T Cさんと同じ考えという人は？（五、六人）

T Aさんと同じ、Cさんと同じ、それぞれの立場で自分の考えを本文の言葉を根拠にして組み立ててみて。

D 僕はCさんと同じなんですけど、エミールのちょうは小さくて貧弱でも宝石みたいにしてあった。そのための技術ももっていたけど、「僕」は美しいちょうなら何でもよくて、エミールはただ「きれいに展翅してないよ」と注意する気持ちだったと思う。

E わたしもCさんと同じで、「僕」はコムラサキには自信が

実践提案 ①

実践提案 ②

実践提案 ③

あって、うれしさのあまりせめてエミールには見てほしい  
と思ひ見せたけど、エミールは鑑賞するような気持ちで何  
か違う。

D 僕もそう思う。この二人は、ちょうように対する目的が違うよ  
うな気がする。

T 目的が違う。それはどういこと？ 目的というより、何  
かな、値打ち？

A 価値みたいなことかな。

T 今日課題だね。ちょうへの思いが違う。価値観が違う。  
では、どう違うの？ 本文の言葉を使って説明して。

このような話し合いを展開し、「目的が違う」という生徒の  
言葉から、「価値観」をキーワードに『宝物と宝石』『欠点と欠  
陥』という表現を読み取り、話し合いの中で自分たちの言葉か  
ら文章表現に立ち戻り読みを行った。教師は一貫して答えは本  
文にあるということ、本文中の言葉を使って課題を書きまとめ  
る作業をすることを終末に位置づけている。また、生徒には話  
し合いに際し、次のような話形を使うことを指導している。

基本 ◆わたしは〜と思います。その理由は〜だからです。

賛成 ◆わたしも〇〇さんの考えに賛成です。その理由は〜だ  
からです。

◆わたしは〇〇さんの考えに賛成ですが、理由は違  
います。〜ということも言えると思います。

反対 ◆わたしは〇〇さんには反対です。〜と考えるからです。

◆わたしは〇〇さんには反対ですが理由は同じです。  
〜というのは、〜ということにも考えられるからです。

終末にC子は次のようなまとめを書いた。

エミールが難癖をつけたのは、ちょうへの思いが「僕」と  
は違うから。エミールのちょうは宝石で、欠陥があつては  
いけないが、「僕」は捕まえることが好きで、珍しくなくてもよ  
かった。欠点があつても自分の宝物だからいいという思いがあ  
り、二人のちょうように対しての思いや目的が違うことがわかつた。

このまとめを『『宝石・宝物』『欠陥・欠点』の四つが考えの  
根拠だね。』と押さえると、一度も発言をしなかつたF子は、  
最後のまとめを次のように書き直した。

「僕」とエミールはちょうへの価値観が違った。「僕」にとつ  
ては宝物で、エミールには宝石だった。わたしは「僕」が傷つ  
いた気持ちがよくわかる。

←  
書き直したまとめ

「僕」はちょうを宝物ととらえ、エミールは宝石ととらえて  
いた。だから「僕」がエミールに自慢しに行つても、エミール  
は宝石に欠陥があつてはいけないと考えていたから、こつぴど  
い批評をした。わたしは「僕」が傷ついた気持ちがよくわかる。

黒板の言葉を写すまとめから、その言葉を自分なりに読み  
取った考えを入れて書くまとめに変化している。F子は教科書  
の本文に線を引くことはできていたが、仲間のまとめを聞くま  
では黒板のまとめを写していた。仲間の話し合いを聞くことを  
通して「読みの着眼点」を二つ以上使い、自分なりに考えを読  
み取ることができた。そこで評価規準を達成したと評価した。

本文のどこの表現を、どのように読んだからこう考えた、と  
いうように、なるべくたくさん根拠を述べる姿を目標してい  
る。そして「だれか今日のまとめを言ってくれる人？」と言つ  
て、読みのまとめを教師の前に生徒が行うことを心がけている。  
この話し合いを生かし、文章中の言葉を使って自分の考えを  
ノートに書きまとめさせたい。考えを書きまとめる手順は  
次のようになる。

① 一人読み	今日の課題を自分なりに考えて書く。
② 小集団で根拠を 確認	自分の考えの根拠を交流し、初めの考 えの根拠をもつ。(ここまでに自分の考 えをもつ)
③ 一斉指導での 話し合い	自分たちの考えを交流し、課題を解決す るための根拠となる表現を確認する。本 時の課題解決に必要な言葉をつかみ、そ の言葉を使って話し合う。
④ 仲間の考えと 聞き比べる	自分の最終の考えと比べて、根拠とな る表現と書いた考えを確認する。
⑤ 見直し	自分に足りない部分を書き直す。

(3) 生徒がわかりやすい評価規準

この授業での評価規準は次のようにした。

○『宝物』『宝石』などの「読みの着眼点」を二つ以上使い、  
『僕』と『エミール』のちょうに對する思いの違いを百五  
十字程度で書きまとめることができる。

「二人の思いの違い」だけではなく、『宝物』『宝石』を評価  
規準に盛り込むことで、生徒がわかりやすい評価となる。

3 本文中の言葉と出会わせる授業

初めは仲間の考えを聞きながら賛成・反対の立場で自分の考  
えをもつ姿であるかもしれない。しかし、できれば仲間の考え  
を聞くまでに、自分の考えをもつ生徒にしていきたい。

そのためにも、本文の言葉とじっくり向かい合わせて自分自  
身の考えをもたせたい。仲間と交流し、本文中の言葉と出会う。  
その言葉を用いてさらに自分の考えを深め、仲間の考えと比  
べて最終の自分の考えを組み立てる。

人の言葉を借りて自分の考えとする生徒にしないように、本  
文の言葉と出会い、自分の言葉と出会う「考える生徒」を育て  
たい。

【自信をもって考えを発言する】

